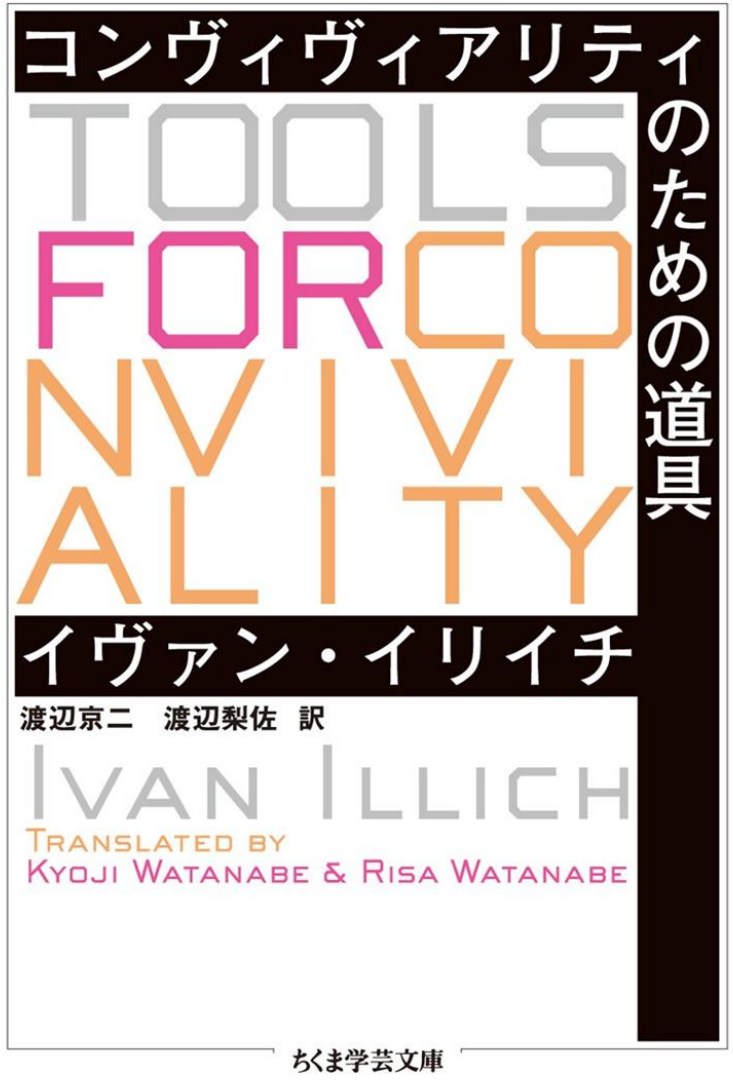
発題

ことばの学びと
コンヴィヴィアリティ―「JLPT」



家根橋 伸子
やねはし

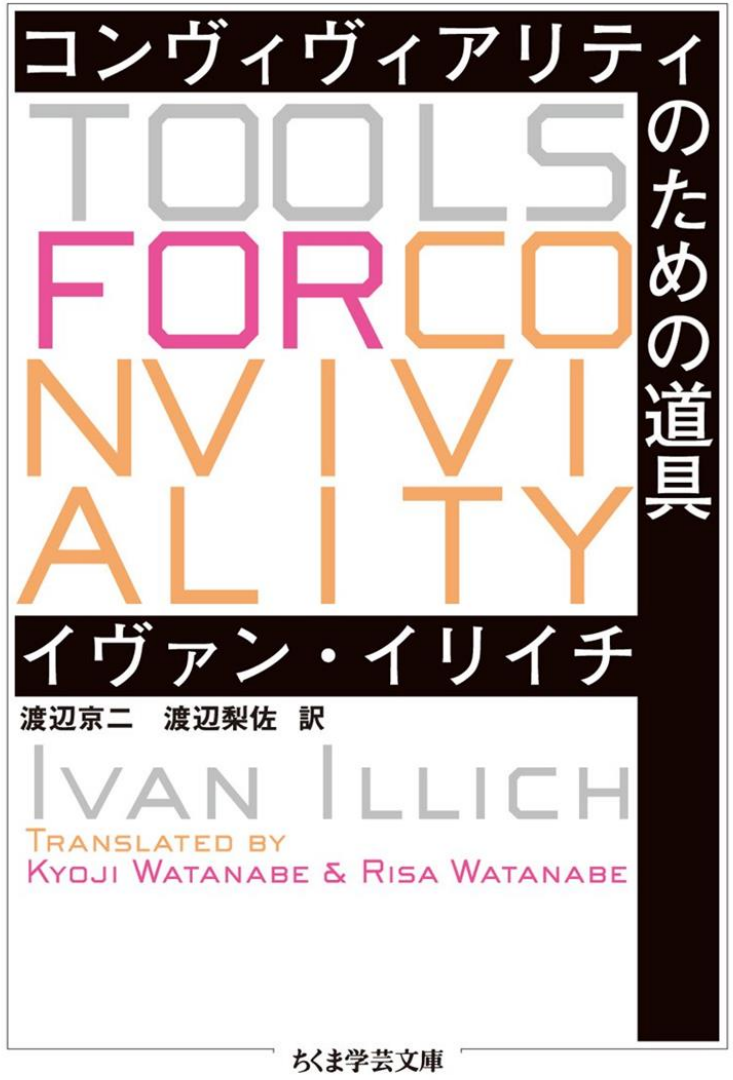
発題の内容

発題者の紹介

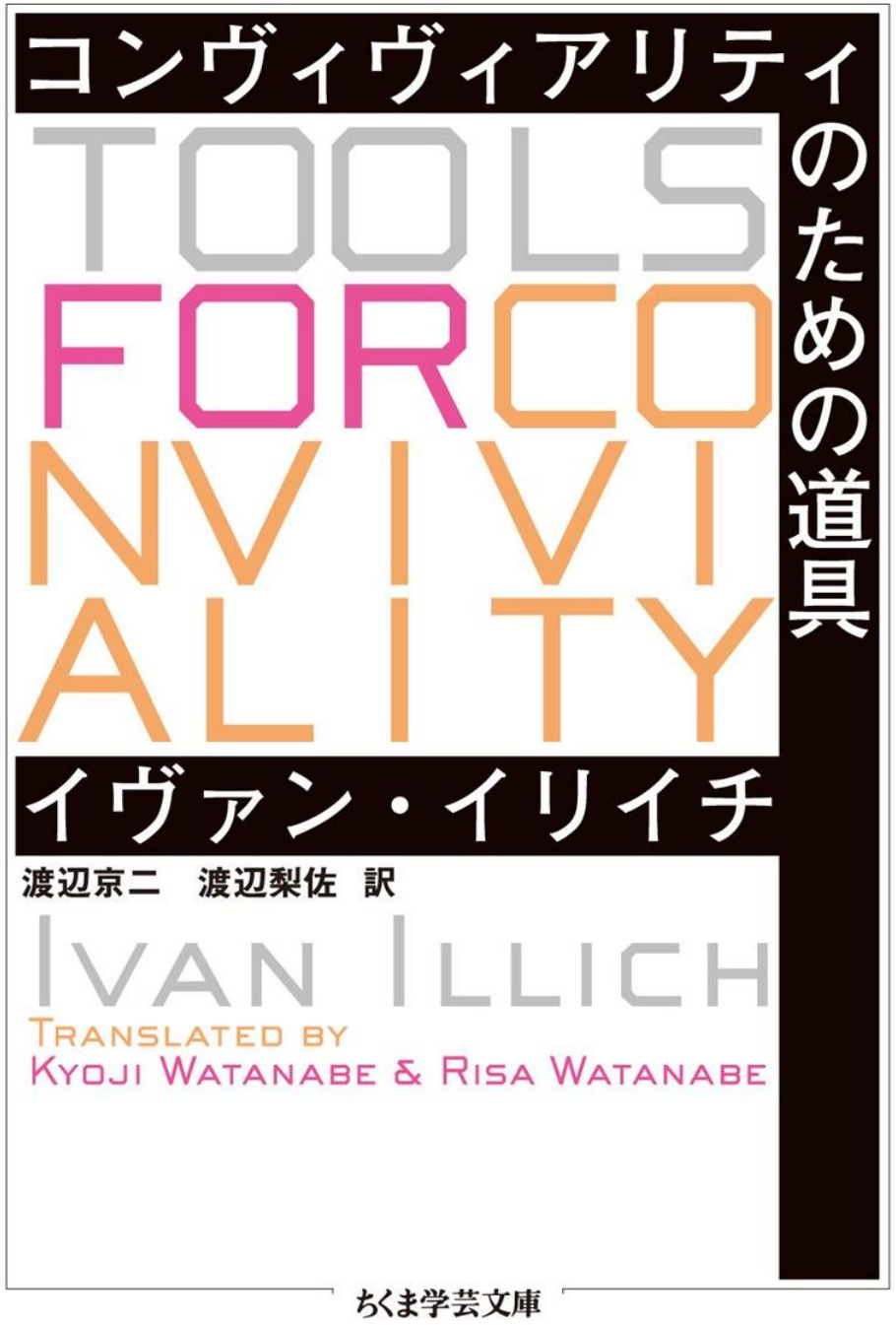
「コンヴィヴィアリティ」

道具としての「JLPT」：「JLPT問題」

「コンヴィヴィアリティ」とことばの教育の回復



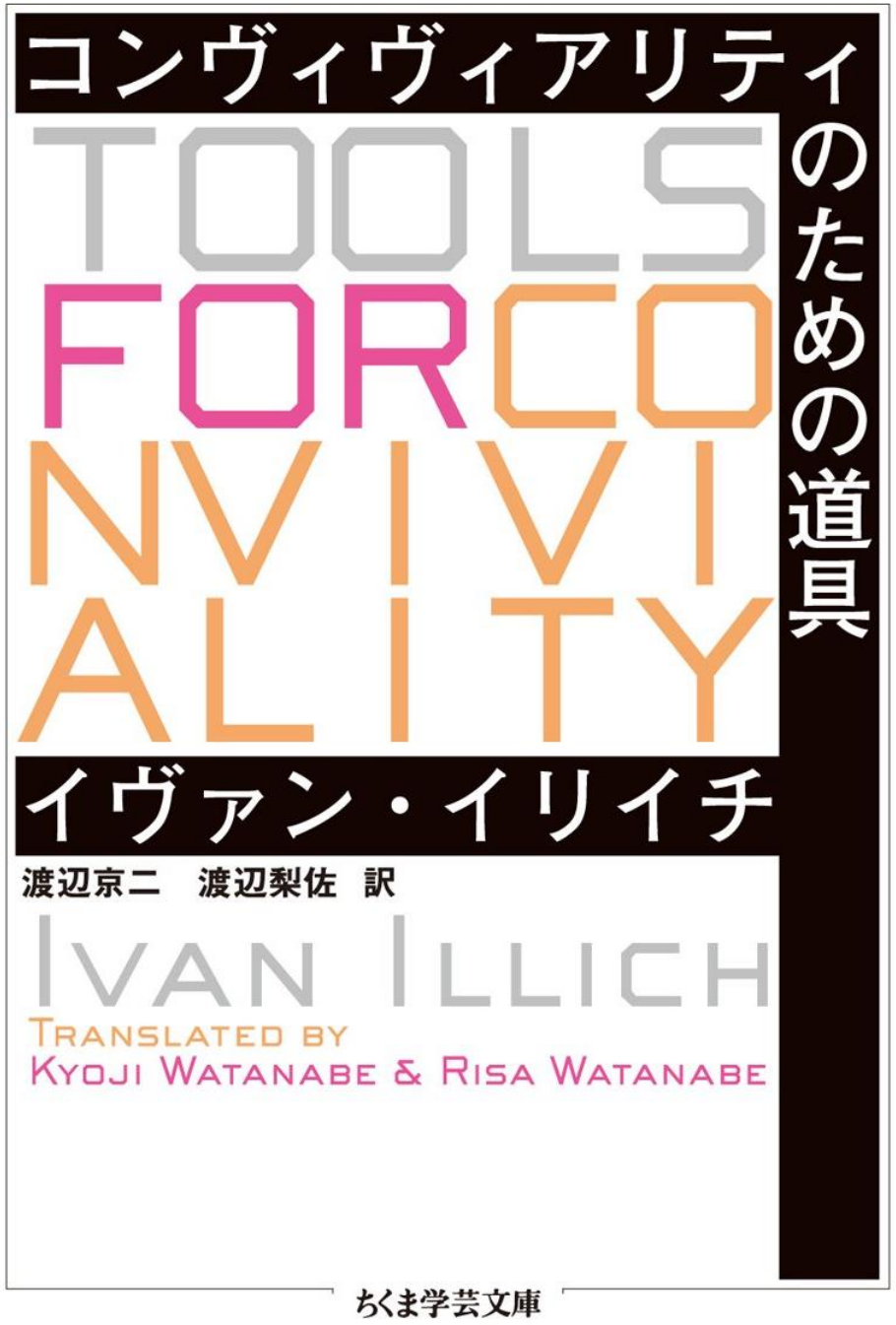
発題者の紹介



やねはし　のぶこ

「コンヴィヴィアリティ」？わからない。多文化共生？

でも気になる



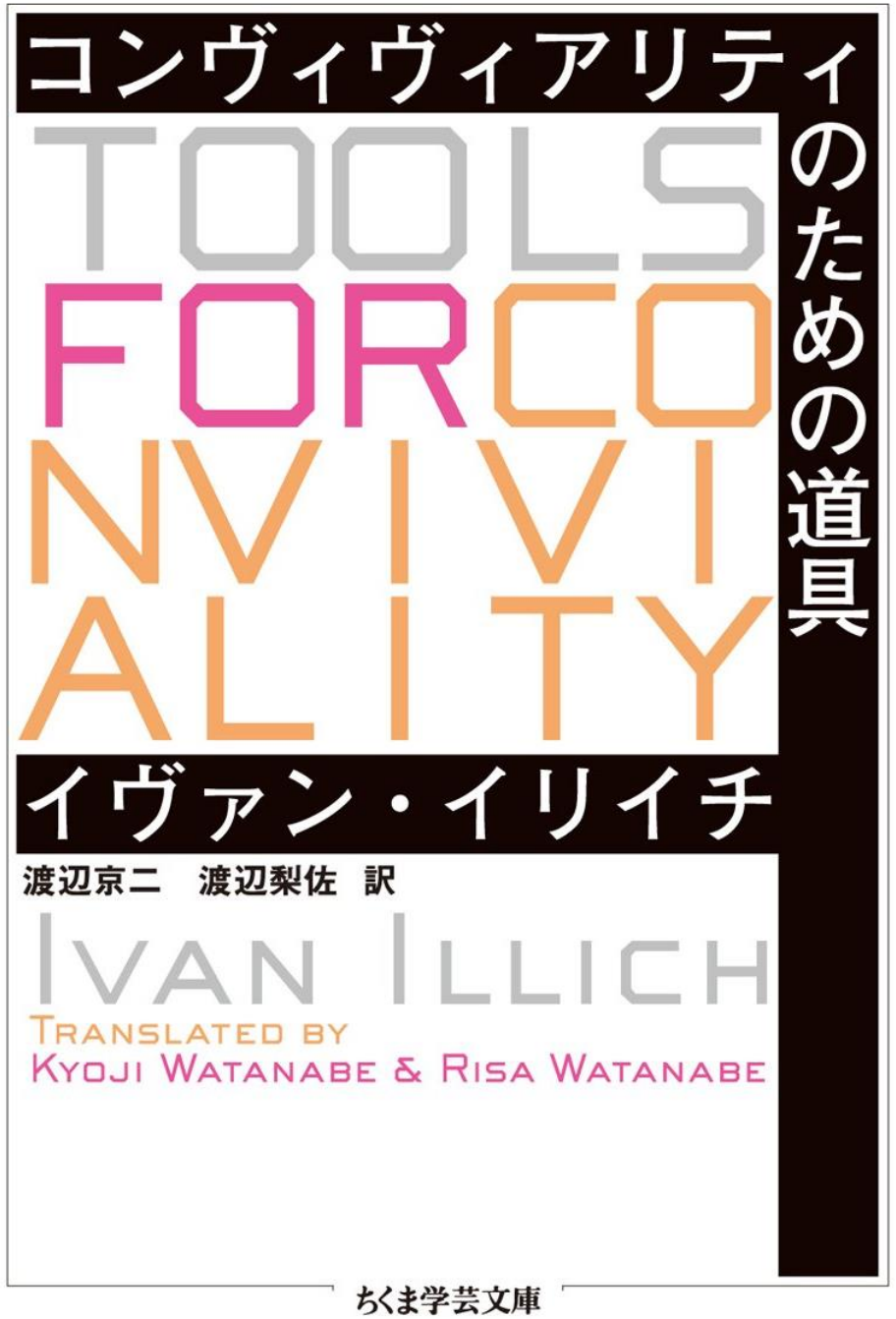
大槻（2011）

- 「道具」より対話に注目？

Symbiosis：「棲み分け」としての「共生」

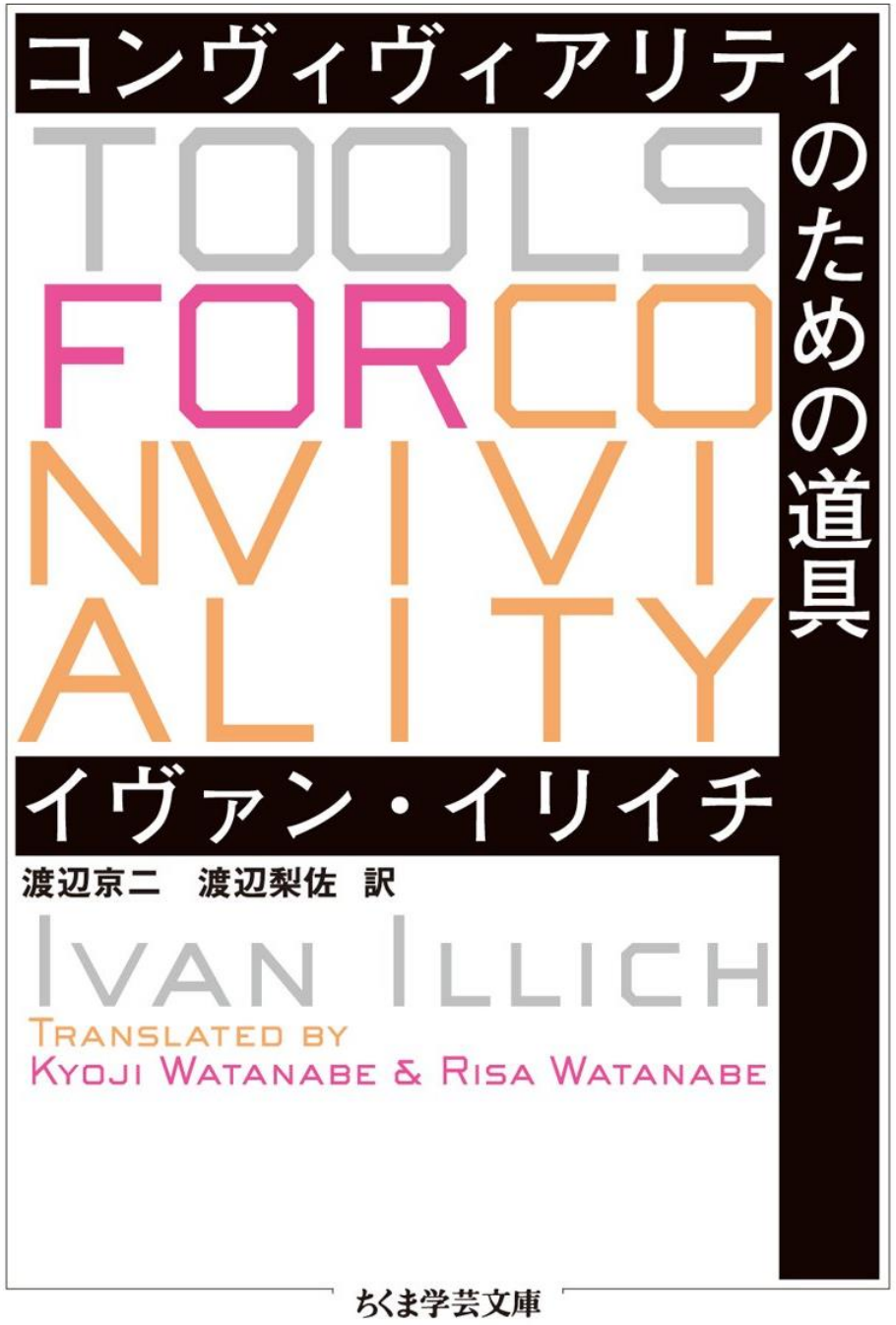
Conviviality：「自立共生」・・・人々の間（または個人と環境の間）における自立的で創造的な交わりを重視

- 社会成員の自由と自立が確保され，日常生活におけるコミュニケーションが自発的に行なわれる「共生」（p.73）
- 異質なもの同士が接触し，相互の認識・理解が進展することによって，（片方の集団だけではなく）双方の集団に変化が生じる交流
- 「対等性」とその対等性を実現する上での積極的な「コミュニケーション」に注目



イリイチ（1973=1989）

「私はその言葉（*コンヴィヴィアリティ（「自立共生」））に，各人のあいだの自律的で創造的な交わりと，各人の環境との同様の交わりを意味させ，またこの言葉に，他人と人工的環境によって強いられた需要への各人の条件反射づけられた反応とは対照的な意味をもたせようと思う。私はコンヴィヴィアリティとは，人間的な相互依存のうちに実現された個的自由であり，またそのようなものとして固有の倫理的価値をなすものであると考える。」（39-40）



やねはし

・・・同じくイリイチに依拠しながらも多様な読み取り

⇒本発題ではコンヴィヴィアリティの「道具」に焦点を当て，
私自身が身を置く日本語教育の世界を見直したい

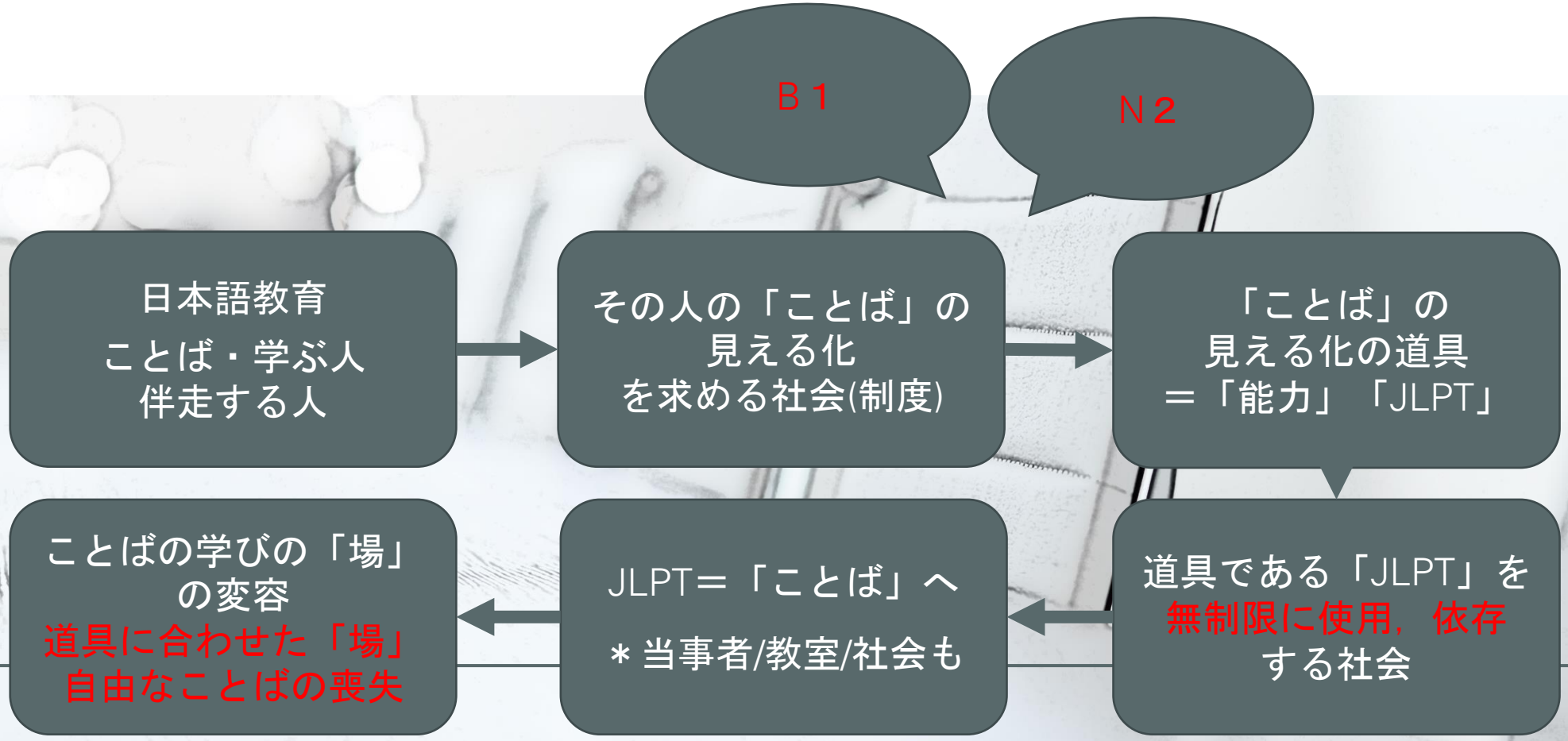
松本・家根橋（2021）

「留学生のキャリア形成と「JLPT問題」－複言語・複文化能力を強みにできないジレンマの語りから－」

日本でキャリア形成を進めようとする留学生に，JLPTが重視されることがどのように作用するか、その「不可解さ」に留学生はいかに対応しながら就職活動を行っているのかを考察

日本語教育を取り巻く社会に溢れるJLPT/JFS

松本・家根橋（2021）「留学生のキャリア形成と「JLPT問題」―複言語・複文化能力を強みにできないジレンマの語りから―」



問い：コンヴィヴィアリティとことばの教育

≠ 「JLPT」不要論

・・・e.g. 地域日本語クラスで，学習者から夫婦のコミュニケーションの道具として語られた「JLPT」

- 当事者・社会が，「道具」としてのJLPTの支配と虚構性を認識し，使用を制限する
- 複数の「道具」を使う

・・・・・・・「ことばとは　どんなものか」ということを考えつづける教師であること＝道具からの「自立」

参考文献

イヴァン・イリイチ（1973=1989（2015））『コンヴィヴィアリティの道具』渡辺京三・渡辺梨佐訳，筑摩書房

大槻茂実（2011）「第三章　共生社会―「自立型共生」の理想と困難」田辺俊介編著2011『外国人へのまなざしと政治意識 社会調査で読み解く日本のナショナリズム』勁草書房, pp.68-89.

松本明香・家根橋伸子（2021）「留学生のキャリア形成と「JLPT問題」―複言語・複文化能力を強みにできないジレンマの語りから―」『2021 日本語教育シンポジウム第24回AJEヨーロッパ日本語教育シンポジウム報告•発表論文集』, pp.659-664.